

バイリンガルろう教育の展開－スウェーデンからの報告（４）

鳥越隆士（兵庫教育大学）

4. ろう児・難聴児の「読み書き」を考える：聴覚障害児・者に関わる心理士の会議

丁度スウェーデン滞在中に、古い友人で心理士のオラ・ヘンダール（オスターバンクス聾学校の心理士）氏から、ろう者に関わる心理士の会議があるから参加しないかと誘われた。スウェーデン語の話しことばを理解するのはなかなか難しいからと固辞すると、英語でサポートをするからと言われ、結局、参加することにした。会場は、ストックホルム郊外のシグトゥーナというところにある障害児のためのリソースセンター。シグトゥーナは歴史的にストックホルム市の発祥の地とも言われ、現在観光スポットにもなっている。このリソースセンターはかつての聾学校。他の障害を併せ持つ聴覚障害児が通っていたが、すでに数年前に閉鎖され、すべての障害児のための地域リソースセンターとして活用されている。

集まった心理士は、いずれも聴覚障害児・者に関わっている。聾学校や難聴学校、障害教育研究所（SIT）に所属していたり、地域の学校に通っているろう・難聴児に関わったり、病院に勤めたりしている心理士 50 人ほどが集まった。日本の人口は 1 億人以上。それでも聴覚障害児・者に主として関わっている心理士（臨床心理士）は 10 人もいるだろうか（毎年日本心理臨床学会の大会で聴覚障害に関わるシンポジウムが開かれているが、そこへの参加者も非常にわずかだ）。900 万人ほどの人口で、これだけの心理士が主として聴覚障害児・者に関わっている。聴覚障害に関わる専門職が、聴覚やことばだけでなく、いかに心や生活を見つめてきたかを物語っていよう。ろう学校や難聴学校にも心理士が常駐している。私のスウェーデンのレポートでも、たびたび彼らに登場してもらった（鳥越・クリスターソン、2003）。

会議では、まず私のスウェーデンでの受け入れ教員であるグニラ・プライスラー教授（ストックホルム大学心理学部）の基調講演があった。彼女は、もともとはろう児の手話発達の研究をやっていたが、現在は、C I 装用児の心理的な成長を追いかけている。もう 1 人の基調講演は、発達障害の専門家（聴覚障害の専門家でない）。スウェーデンでも発達障害を併せ持つ聴覚障害児への指導・支援がホット・トピックである。聴覚障害児を専門とする心理士たちにとってもさらに発達障害の勉強が必要とのことで、この講演が設けられたのだ。その後は、何人かの心理士たちの臨床（実践）活動の報告と意見交換。報告のタイトルをいくつか挙げると、ろう成人のための非言語的知能テストの開発、C I 装用幼児の言語テスト、アスペルガー障害をもつろう学校生徒への支援、W I S C 手話版検査について、難聴児童の読み能力の発達、等々であった。日本で心理士の活動というと、カウンセラー等、臨床心理学的な活動がクローズアップされているが、ここでは、それだけにとどまらず、あらゆる活動に広がっていることがわかるだろう。

この心理士のグループはこのような情報交換のための会議を開催する他、様々な調査研究活動を共同で行ってきた。1 つは、心理検査を手話に翻訳すること。児童の個別発達検査として（たぶん）世界で（日本でも）もっとも使われている W I S C III という検査が、スウェーデン手話に翻訳され、すでに出版されている。このような形で手話に翻訳されている例は、他の国では知らない。それだけ先駆的な取り組みが行われているということなのだろう。そして、以下に紹介するろう児・難聴児の読み書き調査がある。報告書が出ているのでその概要を紹介しよう。

ろう児の読み能力の調査報告 (Resultat från lastest genomförda i klasser med teckenspråkig undervisning, SIT, 2000)

この調査は、2000年春学期に、ろう児2年から10年生の読書力の調査を実施したものである。対象は、ろう学校に在籍する手話クラスの生徒524人だ。聴覚(スピーチ)クラスに在籍する児童は加わっていない。524人の様々な属性による内訳も記述されている。知的障害が17人(たぶん軽度なのであろう、重度の知的障害児はこの調査には入っていない)。アッシュャー症候群15人。4歳以降の聴力障害23人。家庭言語がスウェーデン語やスウェーデン手話以外が56人。いわゆる移民の子弟が10%強もいるということだ。家族の中に本人以外聴覚障害者がいる家庭92人。人工内耳装用児26人。ろう以外の他の障害(知的障害を除く)を持つ者94人。ろう学校の手話クラスに在籍する児童の実態が現われていよう。「ろう児」といっても決して単一の、同質の集団ではないことがわかる。

読みの能力を測定するテストは、複数のものが用いられている。いずれも標準化されているが、単語列や文字列を区切ったり、絵の名前を表している単語を選ぶ、文の内容をもっとも表していると思われる絵を選ぶなどのテストである。

Diagram 16: Fördelning av elevernas resultat. Staninepoäng enligt manualen. Eleverna i årsgrupp 10 är jämförda med hörande barn i årskurs 9 enligt Kronobergsnormeringen.

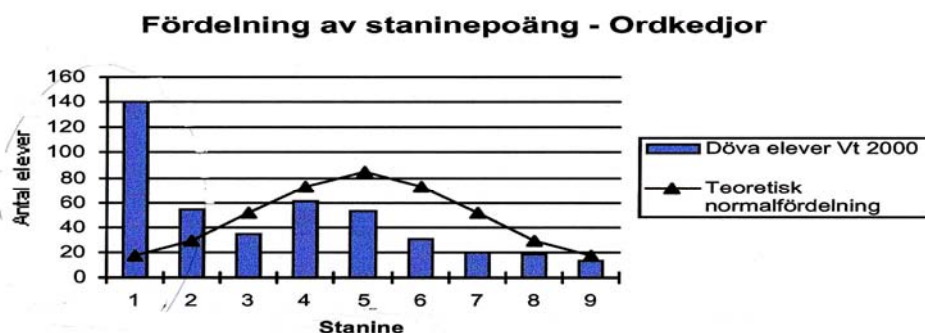


図1, ろう児の読み得点の分布 (YFPDH 報告書, 2000)

図1に単語レベルの読み得点の分布が示されている。棒グラフがろう児の得点、折れ線グラフが聴児(理論的分布)のものである。聴児で標準化されているテストなので、当然後者は正規分布している(釣鐘状の左右対称の分布)。ろう児の得点の分布を聴児のデータと重ね合わせると、全体のおよそ3分の2は正規分布の枠内にある(聴児の分布とほぼ同様と考えられる)。ろう児のベストグループはほぼ聴児に対応している。すなわち聴児とは異なったストラテジー(聴覚でなく、視覚を活用している)をとりつつ、同等の読みレベルに到達していると言えよう。一方、3分の1の児童生徒が低い値のところに固まっている。特別な支援を必要としている子どもたちと言えよう。この3分の1の児童生徒に関してのさらなる分析は、この報告書ではなされていなかったが、先のろう学校訪問でも、教師により多く語られていた子どもたちである。心理士の集まりでもこれについてうかがうと、移民の子弟や発達障害を併せ持つなど、不利な条件下にある子どもたちが入るだろうとのこと。これらの子どもたちは、先の稿で、ろう学校の関係者に、全国学力検査に合格できていない生徒の背景をうかがった際に列挙された「原因」と重なる。バイリンガル教育の導入によって、聴児並みの成績が必ずしも達成されて

いない状況が、少なからずろう教育関係者にショックを与えていることは先の稿でも述べたが、単純にバイリンガル教育や手話の活用による「失敗」とは考えられていないこと（もちろん改善すべき点は、日々行われている、例えば聴覚の活用に関して）、その原因に関しても少しずつではあるが、解明されつつあることは特記すべきであろう。このことは、次の調査、難聴児の読み能力の調査でもうかがえる。

難聴児の読み書き調査報告 (Lasutveckling hos horselskadade elever, skolaren 2-6. by Ola Hendar, 2004, SPM)

この滞在中にまたびっくりするような資料を得た。難聴児たちの読み能力の調査が実施されたのだ。そして、実は、難聴児たちも学習面で苦戦していることが明らかになった。調査の項目は、先のろう児の 2000 年調査とほぼ同じ内容だ。ただ対象は全国でなく、南部地域に限定されている。オスターバンクス聾学校の心理士、オラ・ヘンダール氏が中心になって調査が実施された。

対象児は、スウェーデン南部（スコーネ地方）の難聴児（2-6 年生）111 人（36 人が難聴学校（学級）、75 人が通常学級に在籍）。ろう学校在籍の難聴児は含まれていない。また 12 人は家庭言語がスウェーデン語以外。4 人が CI 装用児。平均聴力レベルは、ばらつきはあるが、大半が 30db から 80dB の範囲に入っている。軽度から中等度難聴と言えるだろう。

様々な分析結果が盛りだくさんに報告書に載せられているが、特に興味を引いたのは、学年と成績の関係である。表 1 と表 2 に難聴児童の読み検査の成績（平均値と標準偏差）が示されている。この検査は、平均が 5 点になるように作られている（聴児で標準化）。したがって、5 点以上だと聴児並みの読み能力が発達していることになる。表 1 に 2 年生の成績がある。いずれの検査でも聴児と成績の差はなかった。しかしながら、表 2 が示すように、4 年から徐々に聴児との差が広がっている（3 年生はサンプルされた児童数が少なかったため、分析から除外されている）。

表 1、難聴児小学 2 年生の読み能力の成績

（得点は平均 5，標準偏差 2 で標準化）

	文字レベル	単語レベル
平均	4. 7 5	5. 2
標準偏差	1. 6 2	1. 6 2
人数	2 0	2 0

表 2、難聴児小学 4～6 年生の読み能力の成績

（得点は平均 5，標準偏差 2 で標準化。統計的に有意に低い値は下線）

文字レベル

学年	4	5	6
平均	<u>3. 8 5</u>	4. 4 4	<u>4. 0 8</u>
標準偏差	1. 9 7	2. 0 6	1. 8 7
人数	2 7	2 5	2 6

単語レベル

学年	4	5	6
平均	4. 1 1	<u>3. 6</u>	<u>4. 0</u>
標準偏差	2. 4 2	1. 6 6	2. 1 2
人数	2 7	2 5	2 6

文レベル

学年	4	5	6
平均	<u>3. 7 8</u>	<u>2. 9 2</u>	<u>3. 5</u>
標準偏差	2. 5 9	1. 9 6	1. 6 3
人数	2 7	2 5	2 6

この調査に参加した多くの難聴児は軽度か中等度の聴力レベルを持つ。多くは手話の環境に
なく、聴覚の活用と話しことばだけで学校生活を送っている。聴覚が活用できていても、読み
能力の獲得には苦戦していること、学年が低いときにはその傾向は顕著でないが、学年があが
るにしたがって、顕著になることが示されている。第一言語としてのスウェーデン語の獲得(生
活言語)はそれなりになされているが、その後の言語発達(学習言語)が十分でないというこ
とを示していよう。

これに関連して、全国難聴者協会(HRF)の年次報告書に興味深い数字が載せられている。
全国難聴者協会は、毎年難聴者や難聴児に関して様々な統計を報告書として公表している。
2005年から教育に関する統計も加えられた。その中で全国学力検査の結果も示されている。
そこで難聴児が(ろう児と同様)苦戦していることが明らかになった。全国にろう児のための
高校と難聴児のための高校が1校ずつある。前者に関してはたびたびこの稿でもその苦戦の様
子を報告したが、実は後者でも苦戦していることが明らかになった。難聴児のための高校の入
学者のおよそ半数が正規のプログラムに入学できていないのだ(すなわち、中核3科目、スウ
ェーデン語、英語、数学のうち1つ以上が不合格)。

報告書の中で、この結果に関して、「我々難聴者は学齢期、大きな集団の中で孤立していた」
「多くの難聴児は学力的に苦戦を強いられている」「難聴児にとってもバイリンガル(音声語
と手話)が必要だ!」「現在も手話の環境が不十分だ、ろう児本人や親、兄弟に対する手話学
習のサポートはあるが、難聴児本人にはない」「手話を知らないと高等教育で手話通訳のサポ
ートが受けられない」などと語られている。そのような後押しもあって、第3稿で述べたよう
な難聴学校(学級)での手話への取り組みが少しずつ広がりつつあるのだ。

難聴児(ろう児も含め)の全国学力検査の結果については、新たに2007年に報告書が公表
されている(Uppfyllelse for dova och horselskadade i skolan, 2007, SPM)。そこではさ
らに、細かくグループに分けられ、中核3科目の合格率が示された。ろう児が40%前後である
ことはすでにこの稿でも紹介してきたが、難聴学級/学校に在籍していた難聴児が65%、通常
学級に在籍していた難聴児が78%であった。ちなみに健聴児の合格率は90%である。スウ
ェーデン語、数学、英語の3科目それぞれについても数値が挙げられているが、ほぼ同様であっ
た。難聴児の成績は、確かにろう児よりも高いが、それでも、聴児並みの成績が挙げられてい
るわけではない。

これらの調査結果は、日本のインテグレーションをしている聴覚障害児の状況と非常に似ているのではないかと感じた（もちろんスウェーデンで難聴児というと、まさに「難聴」であり、日本の難聴学級の在籍児童の聴力レベルよりはるかに軽いことは考えないといけないが）。ここ数年、私自身、日本の難聴学級とも関わる機会が増えてきた。その際、難聴学級担当の先生方からよく、小学校低学年の時には何とか交流クラスの授業についていけたが、中学年、高学年になるに従って、難しくなってきた、あるいは、聴覚もスピーチも活用できている、なのにそれに相応する言語力、学力がなかなかついていけない、何故だろう、のような話しをうかがうことが多い。もちろん、何度も議論されているように発達障害の問題は考えなければならぬだろう。ただ教室での子どもたちの様子を見ていて、それだけで納得できるようなものも思えない。聞こえるけれど、十分でない音・言語（コミュニケーション）環境から、どのように彼らは言語能力や知識、あるいは心を成長させているのだろうか。そこでどのような難しさを抱えているのだろうか？何とか聞こえるのだから、それをもっと使えばいい、使えば使うほど、使えるようになるのだからと、のように単純には考えることができないのではないか。音声だけか、手話も活用するか、の議論はあるが、その際、やはりコミュニケーションの「質」がもっと問われなければならないだろう。コミュニケーションこそが、言語や知識の源なのだから。

近年、一方では、聾学校にろう児たちが集まりさえすれば、手話がありさえすれば、他方では、デジタル補聴器や人工内耳などテクノロジーが進歩しさえすれば、という議論があるように感じる。それらによっても、やはり「難しさ」が存在するのであれば、そしてそれはコミュニケーションに関わるのであれば、コミュニケーションが学習や言語、ひいては心の成長に本質的に関与していることを踏まえれば、われわれの議論や取り組みは、まずもって「柔軟」である必要があるだろう。もっと柔軟にならなければ、はスウェーデンのろう教育・難聴児教育のいろんな現場で聞かされたことばでもある。

そんな意味で、何度も登場するグニラ・プライスラー先生の CI 装用児の心理的な成長を追った調査研究は、あらためていろいろなことを教えてくれる。

5、あらためて人工内耳を考える

最後に、私のスウェーデンでの指導教員でもあったプライスラー教授（ストックホルム大学心理学部）の調査研究を紹介したい。彼女は発達心理学、特にコミュニケーションや言語発達が専門であり、博士論文では、スウェーデンで初めて、ろう児の手話の獲得過程に関する包括的な調査研究を行った。子どもは、言語が表出する以前に、さまざまなレベルで、周りの大人たちと複雑なコミュニケーションを行っており（表情や視線、身振り等の視覚的なやり取り、まだことばにならない音声（喃語）によるやり取り、おもちゃなど、モノを介したやり取り等）、これがしっかり育ちつつ、それにことばが乗っかって、いわゆる「言語」が出現する。決して言語そのものを教え込んで、言語が産まれるのではない。そのような視点から、ろう児の手話の獲得の様相を記述した研究であった。

彼女は、現在 CI 装用児の心理的な成長を追いかけている。スウェーデンでは、すでに紹介したように 80%から 90%の重度の聴覚障害を持つ子どもたちが、1歳前後に人工内耳の装用の手術を受け、しかも現在の動向としては、両耳装用であったり、重複障害児にも試みられたり、ろう学校の中にも聴覚クラスが作られたり（第一言語として音声スウェーデン語、第二言語としてスウェーデン手話を学ぶ）、親の中に、手話の使用に反対し、聴覚一言語療法

(Audio-verbal method ; A V法) を強固に主張するグループも力を持ちつつある。そのような中で、プライスラーは早くから、発達心理学の視点から CI 装用児たちのコミュニケーションの状況を、家庭で、保育園で、学校で追いかけて、丹念にその様相を記述・報告している。彼女の論文から、その研究の一端を紹介しよう（主な論文はスウェーデン語だが、英語で読めるものとしては、以下のものがある ; Preisler, G., Tvinstedt, A.-L., & Ahlstrom, M. A psychosocial follow-up study of deaf preschool children using CI. *Child: Care, Health, & Development*, 2002, 28(5), 403-418; Preisler, G. The psychosocial development in deaf children with CI. In L. Komesaroff, & M. Jokinen (eds.), *Surgically shaping deaf children*. Gallaudet University Press など)

調査対象児は 22 人の CI 装用児。2 歳から 5 歳の間に手術を行っている。幼稚園や学校での観察の他、本人や親、関係者へのインタビューを行い、スウェーデンの CI 装用児を取り巻く「現実」について明らかにしようとしている。以下では、いくつかエッセンスだけを紹介する。

まず医療チームに対する面接では、関係者は、表面的には手話の必要性を述べていた（スウェーデン社会省（2000）は「CI 装用前に、手話によるコミュニケーションが確立していなければならない」と表明している）が、しかしながら、多くが過去に成人ろう者や手話と関わりをもったことがなかった。

家庭では、3～4 カ月ごとに家庭訪問して、親子の関わりを観察した。半数以上の家庭で、手話が十分に機能していたが、半数の家庭ではそうでなかった。時間が過ぎるに従って、よりスピーチに頼るようになり、それがかえって、コミュニケーションを難しくしていた（子どもとアイコンタクトを取らずに話し始めるなど）。また音声言語を最も発達させていた CI 装用児は、手話も発達させていた。親への面接では、「手話は第一言語として必要と認識している」「子どもが真にバイリンガルになるために手術を行った。耳からのスウェーデン語の学習が容易になるから」などと語られている。ただ「スピーチが可能になるに従って、家庭での手話の使用が減少した」とのことばもあった。

幼稚園での観察も行われている。手話を主に使用する園の場合、言語活動のレベルは高く、ファンタジーや語りが頻繁に生じていた。子どもたちは手話を使用し、内容は年齢相応だったとのこと。手話と口話を併用する園の場合、教師は発話をするとき、子どもとアイコンタクトをとっていない場合が多く、伝わったかどうか不確かなケースが多かったとのこと。通常の幼稚園の場合、聴児と CI 装用児の間に、なかなか象徴的な（例えば、ごっこ遊びのような）コミュニケーションが起きにくかったとのことである。

就学に対しての親の意見も聞いている。半数がろう学校、半数が地域の学校の通常クラスを選択していた。ろう学校を選択した親は、全般的に満足しているとのこと。ただスピーチの訓練については十分でないという不満をもっていた。地域の学校を選択した理由として、家から近いことを主に挙げていた。日常生活の中で、子どものコミュニケーションが困難なことは理解できている、また学校や家の近くで親密な友人関係ができにくいとも語っている。

就学した学校の先生にも意見を聞いている。ろう学校の教師は、CI 装用児がろう学校に就学することに賛成している。CI を装用していても、スピーチの理解や発話に課題が残るため、ろう学校という環境が有効だったとのこと。また通常学級の担当教師は、ろう児や CI についての先行知識はほとんどなかった。また何年か CI 装用児と学校での学習を経験するとその難しさを認識してくるようだ。入学当初はすべてフルに通常の学級にいたが、徐々にアシスタントによ

る個別指導の時間が増えてくるとのこと。アシスタントにもインタビューしている。通常クラスでは手話通訳を期待されることが多いが、そのための十分な手話力を持っていないことを課題として挙げている。

教室での生徒同士や先生との関わりも観察している。通常の学級で、教師は時に手話単語や身振りの助けを借りるが、スピーチがほとんどであった。授業では本人からの発言がほとんどなかった。教室の前の方に座っているので、他の子どもたちの活動や発言がわからない。CI 装用児と聴児とは、身振りやスピーチ、時に少しの手話単語で対話をしていた。一方、ろう学校では、手話が教室での言語で、先生や同級生とは十分にコミュニケーションができていた。

最後に子ども自身にインタビューしている。インタビューができたのは、11人で、8.5歳から10.5歳であった。6人がろう学校、5人が通常学級に在籍していた。うち10人が毎日CIを使用していた。主だった発言を挙げると、CIで環境音を十分聴取できる、ただ家庭での会話への参加は困難であった、単純なことばや質問には答えられるが、複雑な話し合いや議論の場合は難しい、通常学級では先生の言うことがわからない、CIには限界があると感じている、それだけでは、聴覚・スピーチ環境に十分に参加できるわけではない、手話の必要性を感じている、などであった。

以上、研究の概略を紹介した。CI児の置かれている環境が多様であること、フォーマルには手話とのバイリンガル教育が主唱されている（もちろんろう児と難聴児、CI児ではその道のは異なる）が、現実には、手話の部分が徐々に不十分になりつつあることもうかがえよう。バイリンガル教育では、弱いほうの言語を、意識的に強化し続けなければ、うまく行かない、強い言語に飲み込まれてしまうと、あるろう者が語ってくれていたことが印象的だった。

CIの装用により、聴者となるのではなく、難聴者となるということがよく言われているが、もしそうであれば、上述したような難聴児の学習に関しての苦戦を当然、CI装用児も被ることになるだろう。スピーチによる会話が可能になることにより、かえってコミュニケーションの質が低下するという記述もあった。

ただこの論文で扱われているCI装用児はスウェーデンでも第一世代に当たる。装用の時期も遅いし、その後も技術的な革新が続いている。手話かCIかという議論が盛んになされていた頃で、論文の基調も手話よりである。プライスラー先生も、ある時期のCI装用児の「現実」は捉えていたが、現在も同じとは言えないかもしれないと話されていた。

常に、知識と情報を最新のものに更新していく必要があることは痛感している。今、スウェーデンでも教育改革が進行しつつある。アダムスブック等、教材の開発がなされていた障害教育研究所（SIT）は、その主力が障害児の地域支援になりつつある。また今年（2008年）7月には、このSITとろう学校を主に管轄していた特別学校教育局（SPM）が統合されて、新たにSPSM（特別学校、特別支援教育局と訳したらいいのであろうか？）という組織になった。ここ数年、スウェーデンのろう教育・難聴児教育がめまぐるしく変わってきた。それはとりもなおさず、現実を見つめ、それに柔軟に対応しようとしてきたことによるのだろう。

私のフィールドノートに、資料収集で得たCIに関しての国際会議（米ギャローデット大学、2003）で、会議のまとめとして提案された6つの課題が記録されている。それを記す。これは、ここスウェーデンでもなおも現実的で有効な視点だろう。

1、CIの装用の成果は様々だ。従ってCI装用児のニーズも様々である。すなわち我々は常に柔軟でなくてはならない。

2, 手話を排除すべきでない。手話の発達と音声言語の発達は共存する。

3, CI 装用児には、音声言語の発達の機会が与えられなければならない。それには一貫した訓練と刺激が必要。どのように手話環境とバランスよく調整するかが課題。

4, CI 装用児は聴児よりもむしろ難聴児と類似。これまで難聴児の教育は見過ごされてきた。難聴児の教育の結果も様々。個々のニーズに応じたサポートが必要。

5, CI 装用児には、これまでろう児の音声言語発達のために開発されてきたプログラムや技術、ストラテジー（いわゆる聴覚・口話法）が有効。ただろう児よりもより多くの音声にアクセスが可能。

6, 医療関係者と教育関係者の連携が必要。

6, 連載を終えるにあたって

この連載は、2005年に3ヶ月間、スウェーデンに滞在し、聾学校や難聴学校などの調査などを通して、私が学んだ、スウェーデンの今を伝えたつもりである（一部に最新の情報も加えた）。掲載された内容の一部分を捉えて、スウェーデンのバイリンガルろう教育は失敗したのかとの議論があったようだ。また直接、メールでそれに関して意見を求められたこともあった。もとより短期滞在での調査であり、私自身、全体像を捉えることはできていない。多くの人が危惧するように、数字だけが一人歩きし、都合のいいようにその数字が解釈される状況に陥ることがあるかもしれない。だからといって数字が必要でないということではないだろう。常に現実の文脈の中において数字の意味について理解してほしい（したいと思っている）。とにかく、物事を単純化して、「成功だ」「失敗だ」と早急に結論を急がないこと。そのあたり、全体をじっくりと読んでいただくと理解していただけたのではと思っている（書き足らなかったことが多々あったのかもしれない）。

私自身、「何々法」ということに心理的な抵抗感があるのかもしれない。私の専門とする心理学でも、相変わらず「何々法」でこんなによくなりましたと称する実践報告が多い。その人の生活、人生をすべてその「何々法」で塗りつくしてしまうことに危惧を感じてきた。毎日の生活や人生はそんなものではない、1つの方法で塗りつくされてしまうよりももっと豊かで多様な、ある意味では、混沌としたあり様があるはずだとの思いが強い。それは「現場」や「実践」にも言えるのではないか。ただ世の中を変えるには「運動」が必要で、それを進めるためには、ある程度の単純化が必要なのかもしれないのは理解できる。ただ本人やご家族、先生方は日々、「現実」の中に生きていることを、われわれ専門家は常に、心に留めておかねばと思っている。ある方法を実践したからといって、その方法だけが効果を持ったわけではない。人間の成長をそんなに単純化して欲しくないという思いもある。「バイリンガルろう教育の展開」について、筆を重ねる中でそんなことを考えた。

今、インクルージョン（インテグレーション）の取り組みに関心を持ち、ノルウェーに来ている。ノルウェーでは、1996年よりバイリンガルろう教育がスタートした（法律的に整備された）。ただ丁度、CI 装用児の数が激増してきた時期と重なる。ここでもろう学校の在籍生徒数は激減し、多くのろう学校は、その形では存続できず、リソースセンター（地域支援が中心）の一部となった。もともとノルウェーは、障害児のインテグレーションが盛んな国でもある（地理的な状況がそうさせてきたのかもしれない）。そして今、インクルージョン（インテグレーション）の枠組みの中でバイリンガル教育を進めようとしている。親が、子どもにバイリンガ

ル教育のカリキュラムを選択すると、たとえ、地域の学校に通っていても（たとえ、CIを装用しても）、手話によるバイリンガル教育を受ける権利を持つ。もちろん通常の学校の中で、そう簡単に仕組みはできないだろうが、その仕組みを作る努力と取り組みがなされつつある。またろう学校の方でも、インクルージョンに向けての面白い動きがある。ろう学校が、地域の通常の学校との統合（あるいは共同プログラム）を進めている（同じ統合でも、日本の養護学校との統合とは大きく異なる）。聴児もろう児・難聴児もいる、その教室をバイリンガルにしてしまおうというのだ。手話という言語を持つ子どもたちのニーズは必ずしもろう学校の中だけでしか満たすことができないのであろうか。私は必ずしもそうではないと思う。またいずれ機会があれば、ノルウェーの実践の取り組みを報告したいと思っている。

完，2008年9月，オスロにて